

全国連合への批判的提言

奥沢邦成

ここしばらくの間に、興味ある二つの集会がもたれた。その一つは全国連盟結成へ向けての共同合宿（京都・八月二八日～三〇日）、他はリベルテール・アナキズム・イオムの三誌を中心とした交流会である。この二つの集会は、その目的、討議内容を異にしていたが、それにもかかわらず部分的には共通した志向が作用していたように考えられるし、はからずも相似た問題点を示唆したと思われる。

ここでは、この二つの動きを、現在われわれが直面している諸課題に対してなされた一つの問題提起として受けとめ、それらとは異なる立場からの、現状に対する認識と課題とを提出することを目的としたい。そのための、いくつかの論点を取り上げていくことから始めようと思う。

一、全国連合への疑問

昨年提案された「アナキスト連盟再建」の話を初めて耳にしたとき、ぼくはあまりの唐突さに驚かされた。時代錯誤も甚しいと

いうのがその時に抱いた正直な感想であった。そして、それは基本的に今は今も変わらない。ただ、そうした要請が出てくる背景なり、そのための一連の活動が負っている問題は、等しくわれわれに共通した問題であるし、またわれわれが解答を迫られていることでもある、とするならば、ここでは感想ではなく、ぼくなりの考え方、見方を表明していかなくてはならないだろう。

京都を中心とした（あるいは名古屋をも含めた）これまでの経過に関する詳しい内容を把握しきれていないのであるが、その直接の発端は、七三年春にアナキスト連盟の再建といった形で提起されたように記憶している。さらにその後、九月には「大杉栄虐殺追悼五〇周年」の全国共同行動（京都・名古屋・長野・東京）が取り組まれ、七四年になって二月の10・11集会、「日本無政府主義者連盟」綱領・規約草案の作成、そして八月の共同合宿という一連の活動のなかに、全国連合結成の問題を位置づけてよいだろう。しかし、全国連合結成の主張を展開した適切な文書が手本になく、共同合宿の呼びかけも、その点では不十分である。従っ

て、ここでは一般的な疑問を投げかけることに留める。

まず、全国組織の可否、その形態は別として、何が全国組織の提案を奇異に感じさせたかという点であるが、整理してみると二点ある。第一点は、どのような現状分析が全国組織の展望を生み出すのか。二点目は、何故にアナキスト連盟の再建なのか。後者はともかく、現状での主体的な諸条件をどのように分析し判断すると、全国組織結成の展望が開られてくるのだろうか、そして、提案が可能になるのか、ぼくの抱いた疑問のもっとも基本的なものであり、この一点につきるとも言える。運動が全国的な幅をもつこと、そうしたなかで個別の運動が相互的に高められること、その途を拓くための組織を志向することに異議はない。しかし、そうした主張だけならば、おそらくは日本アナキスト連盟が解散して間もなく、個人的にあるいは個別グループによつて主張され、試みられてきた。全国レベルに限らず、地区的にまた大学のレベルでも何回となく取り組まれ、そしてそのいずれもがことごとく失敗している。こうした過去の活動をどう踏まえるのか。また京都においても地区での連合体結成の取り組みが昨今提起されているようだが、そうした活動のつみ上げによる脈絡があるのか。こうした観点が不明瞭なまま取り残されているように思う。

要は、必要性を声高く叫ぶことではなく、如何にしたら獲得できるのか、現状の確認と分析、そして主体的諸条件に基づく展望の提出である。全国組織結成に對置させた客観的条件と主体的条件をもつと明確に提示し、どのように主体を投入しつつ運動を構築していくのかという確たる意志表明がなされてもいいのではないか。以上の点での提案を含まない限り、いかなる美辭麗句も論

理的整合性も不毛であり説得性をもたず、運動としての展開とは無縁な、願望の空言に終始するだろう。また、同じような危険は、こうした全国組織結成の動きに對する時期尚早論にも指摘される。確かに尙早であるに違いないが、それでは問題が摘出されてこない。われわれにとつては時期とか好機とかが問題なのではなく、先に触れたようにもつと根本的なところに眼を向けなければならぬのではないか。一言でいえば、何よりも全国組織を結成し、維持運営するに足る顕在的かつ潜在的な能力と力量の欠如こそが、疑いもなくわれわれの眼前に横たわっている。

このことは、これまでの同様の試みに對する総点検を不可欠とするであろうし、この点から眼をそらせては、もはや何ものをもわれわれは達成し得ない。と同時に、こうした事実を長い間、全国組織という名前のもとにおおい隠してきたのが、他ならぬ日本アナキスト連盟であるとしたら、その再建という発想は何を物語るのであろう。

二、アナ連の批判的総括を

もつとも、もはや論議は日本アナキスト連盟の再建ではなく、別個の全国連盟の結成であるのだから、先の表現は不当であるかもしれない。だが、その発端は「アナ連再建」であつたわけだし、必ずしも的はずれた指摘とはいえない。

例えば、ちょうど二〇年前に山口英氏がアナ連の全国代表者会議で、きわめて興味のある問題を提起している。われわれは今日、そこに提起された問題を見過ごすことができるだろうか。臆することなく答えられるであろうか。すでに二〇年も昔に指摘された

ことではあるが、この文章のいくつかの語句を書き換えてみたらどうであろう。

△アナキスト連盟の組織の改革（再認識）と当面の運動について（一九五三年一〇月・全国代表者会議） 山口 英

……われわれはそれを実現する方法論をもたぬ誇大な、当面の「行動綱領」をもち、実行されない完璧の規約をもっている。

全国に点々とするわずかな連盟員。名前だけつらねている正式連盟員や、連盟員なのか連盟員でないのか分からない責任もない少数のシンパ。出会えば話もし、すこしの金は出してくれる程度の少数の古いアナキスト。加盟したと思つたら脱退する若い人たち。こうした人たちをかかえて連盟の地協組織は現在ではもはや壊滅したにひとしい。あるのは一部の人たちの個人的活動だけである。では一体なにがあるのか。機関誌「アナキズム」の不定期刊行と、各地の計画的でないゆきあたりばったりの少数のなごり集会だけである……。

われわれは思想サークルにすぎないのに、もつと大きなことを考え、サークルを越えた組織の運動方法と形態をとり、いたずらに空転してきた。サークルであるのにサークルとしての方針をもちえなかつた。連盟でないのに連盟のような方針と行動をもととした。ここに無限縮小の根本的原因があり、連盟という組織を考えなおしてみる理由がある。

連盟が思想サークルにすぎないのなら、連盟をそのように改組しよう。このことは今ある連盟をたたきこわせということでは決してない。現実には連盟はそうになつてゐるのだから、この事実を確認し、形態と、われわれ自身の意識をそれに密着

させようというだけのことである。まず第一にこの事実を確認すること、第二にこの事実をしつかり踏まえてどの方向にきりこんでゆくべきかを見極めるということ、第三にはその方向についての具体的方法を考え、そして全加盟員が全力を集中して奮闘努力することを約束しあうことを意味する。

（向井孝『山鹿泰治』より）

ここで主張された三つのこと、第一にこの事実（主体的状況）を確認すること、第二にこの事実をしつかり踏まえてどの方向にきりこんでゆくべきかを見極めること、第三にはその方向についての具体的方法を考えること、おそらくぼくがここで言おうとしたこと、これから述べようとすることは、残念ながらそのくり返してしかないだろう。そして、この時間的な隔りは、われわれにとって致命的に重いのである。

三、課題の深化を

もう少し論点をはっきりさせよう。次の引用文は、『リベロー』紙二一号に掲載された「無政府主義者の全国連合を共におし進めよう」というアピールからである。多分、全国連合結成に呼応する立場からなされた主張のもつとも簡潔な内容表現であると思う……混乱すらもない今日の状況、つまり無政府主義者間の意志疎通の試みすらなされない、または十分にできない状況にあつて、この連合——全国的共同行動体制——全国連合のよびかけは、まさに大胆な、それ故成功した時の可能性は新しい展開を保障するものである。

無政府主義者の永年の停滞を打破するために、このよびかけ

に積極的に答えなければならない。運動の発展は、全国連合なくしては望めないからである。……無政府主義者のなすべきことは、まず連盟の必要性に関する検討である。

ここで考慮すべき第一点は、果して運動の発展が全国連合なくしては望めないのか、全国的な連合が現段階において運動の新しい可能性を開くものなのか、にある。この点に関しては、すでに指摘したように戦後二〇余年の間全国組織として存在したアナ連のもとでの実情を一顧すれば十分であろう。そしてここには、明らかに問題の組み立て方に転倒がある。むしろ検討されるべきは、われわれの現実的な質と力量であり、その確認にもとづく具体的方法の獲得であり、それこそが決定的に全国連合の質を左右するのである。以上の論議を踏えない限り、全国連合結成の提起も策士の行為に終わるか、野合をしかもたらないであろう。

全国共同行動に関しては、運動の全国的な拡がりを実質面で構築していく方向を含む提案として評価したいが、それはまだ連合の布石となる内容をもちえていないし、全国組織の問題とははっきり区別して論じるべきだと思う。両者の関連性ゆえに、好都合なすり換えが出てくるであろうことは目にみえている。この点に関しては、むしろ共同行動の定着化と蓄積という課題が先行するであろうし、そうした過程での全国組織の結成という流れが自然であると思う。

また、全国連合の必要性に関する討議が強調されているが、こうした論議も提案自体の不自然さを示している。必要性とは本来的にいって、「あればよい」とか「あった方がよい」という方向に流れていく傾向をもつし、必要性の拒否は、異なる主張を強調す

るための否定用法でしかなく、気負いなくみれば必要性を感じるところから討議が可能となってくるのであって、それは前提ではない。もつとも、必要性の共有というレベルでの討議が目的であるならば別であるが、合宿のレジメが綱領と規約の草案であることから判断すれば、必要性の強調は別の目的をもつたろう。

必要性は、ただ確認しあうことで十分なはずで、それだけの内在的な質を個々人がもちえていない限り、何回会合を重ねても実質的な力とはならない。こうした現状が、全国連合を「それ故成功した時の可能性は……」と受けとめる感覚に通じる。しかし、これは受けとめる側の問題ではなく、呼びかけ自体の混乱と脆弱さを物語っている。

結局、全体としてみると、運動の現状のなかで全国連合をどう位置づけていくのか、この重要な点での討議が質的にも全国的拡がりの面においても十分に提起されていない現状では、全国連合さえつくれば諸問題は明るい展望のもとに解決されるといった短絡的発想をもたらずに、直面している諸課題の追求と深化を全国連合問題にすり換えてしまうといった危惧もぬぐわれない。また、必要性の強調も、個別具体的な主体条件にもとづくことのない「必要性」レベルでの刈り込み方法に帰着せざるを得ないだろう。そして、以上のことがらは、結局のところ、野合が成立するか否かの質をしかもち得ないのである。

そして、こうした動きが、われわれの現状とその根源的な課題を、連合の必要性論議という上すべりな問題に置き換える結果を招くことの危険性を重ねて述べておきたい。

四、地区連合の追求を

これまで全国連合の提案を批判的にみてきた。しかし、論じようとしている個々のテーマ、論点の一つひとつに関しては、われわれ自身もつと意識的に取り組み深めていかねばならぬことであると思う。その意味では大切な提起を部分的には含んでいると言える。例えば次のような、昨年の大杉追悼集会での発言、主張に意義は感じない。

各地の無政府主義者が、様々な闘いを、様々な方法で行なっているということをまず確認したい。今、全国の無政府主義者の共同行動を呼びかけるにあたつて、各地の様々な行動を統一するのではなく、連合するのだということ、そうした多様な形態を生かしつつ、重層的な自由連合の圧倒的噴出を生み出すのだということ……

（『現代無政府主義運動』二号より）

しかし、こうした考えに対する敬意ゆえにわれわれ自身の現状を、そうした思想の担い手と自覚するゆえに今日のわれわれの脆弱な体勢を冷静に認識し、やはりまずわれわれ個々の足場を構築していきたいと考える。一つひとつの活動が各々の基盤をもつこと、もつとも基本的なことであるが、それゆえに一層このことに固執し、個々の活動、運動の自立を主張したい。そしておそらくは、そうした志向の不可欠な契機として、個別相互の運動の深まりがきわめて具体的に、きわめて現実的な次元での連合を要請する、と考えている。

われわれが現在抱えている課題は数多い。それらをどう自から引きつけ、取り組んでいくか、どのような方法をもつて切き込

んでいくかは決して一律ではありえない。しかし、現在論議されている提案はその現状認識と方法とにおいて誤りを含み、もしくはあまりにも不十分すぎる。百歩譲つたとしても、他を納得させるに足る内容と説得力をもつものではないし、その取り組みの体勢、方法も十分ではない。それは、提出され、獲得された具体性が唯ひとつ多分に私的な綱領・規約の草案でしかないことによつても明らかである。いうまでもないことだが、全国連合の結成は大変な仕事である。労力と時間とをかけた着実で粘り強い準備が必要であろうし、共同の構想のもとに積み重ねられた個別の、ときには共同の諸活動しか、全国連合の内実を保障しないだろう。

こうした考え方からすると、具体的には昨年あたりから取り組まれている関西地区での連合の試みがどう進展しているのか、そして関西での地区連合の取り組みを踏まえたところから、やはり関西地区としての提案となつてこそ、他の地域をまき込んだ全国連合結成への可能性を孕むのではないか。少なくとも、関西段階での内部的な意見の違いは違いとして表明されなければ、それはすでに出発点において「多様な形態を生かしつつ、重層的な自由連合」組織の可能性を窒息させることになる。

五、具体性の獲得

全国連合の提案に関するぼくの考え方を幾分かの推測を交えつつ述べてきたが、次に、直接に参加した富士での交流会をふり返りつつ、両集会に共通するであろう問題点を探ってみようと思う。

富士でもたれた、リベルテール・アナキズム・イオムの三誌を

中心とした交流会（実際には月刊リベロを含む）は、発案の段階では全国的な交流会の構想と重なりあっていたようである。現実には、三誌を中心とした交流会の形で、一切の付帯条件を取り払った交流にのみ限定して取り組まれた。議題は参加者の持ち寄り、時間の制約のため十分な討議は望むべきもなかったが、素敵な夕食会が印象に残った。

交流会での討議を思い起こしながら強く感じるのは、われわれの直面する課題の一つの在り様は具体性の獲得ではないかということである。具体性とは、個々人の活動の現状から要請されるところの具体性であり、活動のその時々結果であって同時に次のワンステップに不可欠な要素としての具体性である。そうした質を個々が持ち得ない限り、連合もその本来の力を発揮できないだろう。次に、交流会で提起された「全国交流紙」に関連して、その点を指摘しようと思う。

席上、全国的な交流紙の必要性と『月刊リベロ』紙をそれにあてては、という提案がなされた。交流紙の意義と必要とについては大方の賛成を得たが、提案の後半については同紙が研究センタールの広報を目的としていることを理由に編集発行人に拒否された。しかし何故、交流紙発行のための私案を作成提出していた当の編集発行者が、その提案を拒否しなければならなかったのか。ぼくはその私案を読み返えしつつ、次の点に気付いた。すなわち、私案によれば「交流紙を作るために」と題して、五項目の提案が述べられている。それは発行所、定期刊行、編集（通信）委員体勢、発行主体の性格、呼びかけ方に関したもので、その一つひとつの内容の当否はともかく、現状を踏まえつつ、交流紙発行のた

めの基本的な考え方を展開している。

そこではすでに、如何にしたら、どのような体勢、方法によって交流紙を発行していくのかに視点が置かれている。必要性とかリベロ紙を交流紙へ、といった問題はもはや踏み越えられており、そこではさして意味のあることではなかったのかもしれない。それゆえに、同じ志向に根ざしながらも二つの提案には大きな落差があり、位相のずれがあったと言わなければならない。そして両者の溝を埋めるには、討議のための時間があまりにも少なすぎたことも事実であるが。その提案は次のように述べている。

交流紙の目的、指針もやがては文で、くわしく明らかにする必要も出てくると思いますが、規約やスローガンの一致点を求めて協力できるのは次の次で、交流紙を出す協力者は、話し合いや、具体的な行動で信頼関係を深めていくことによつて、始めてスムーズな協力体制ができると信じます。原則はやりたいたいと思う人がやるのですから、どんな人にも協力してもらい協力できるように活動は公開し、協力の呼びかけは具体的な内容をもつて続けることがいいと思います。

改めてくり返すまでもないことだが、このように主張する発行者にとつて、おそらくこの一年の間独力で支え、作りあげてきたリベロ紙への固執と、同紙を一層の拡大発展を意味する交流紙に提供することとは決して矛盾していない。

六、二つの方法

交流紙をテーマにした二つの提案の差違を、とりたてて具体性の獲得として強調したのはそれなりの理由がある。大事な点であ

るし、その欠如を常々切実な問題として体験しているからである。ものごとが具体性を帯びてくると彩りがあせて、日常の煩雑なわずらわしさが頭をもたげてくる。しかし、それらを日常でおい込むことができない限り本当の力とはならず、われわれは一步も進めない。こうした感覚がぼくのどこかに潜んでいる。と同時に、獲得された具体性こそ、発想を豊かなものにする限りない土壌であるとも考えているのである。

先に引用した私案の一部を思い起こして欲しい。「規約やスローガンの一致点を求めて協力できるのは次の次で、交流紙を出す協力者は、話し合いや、具体的な行動で……」という一見何でもないこの語り口が、実は大切な論点を含んでいることに注意を向けたと思う。つまり、ここで述べられた内容を、京都での全国連合に向けた共同合宿でのテーマ——綱領・規約草案の討議に對比させると、両者の対照がきわだつてくる。まず規約での一致を画る立場と、規約は二の次でまず具体的な行動を主張する立場と、ここには明らかに異った発想と方法とがある。

現状がわれわれに対して何を要請しているのか、漠然とではあっても多くの人がこのことにおそらく気付いているだろう。だが、現状の枠をどうつき破っていくか、課題が何で、それをどう探めていくのかを十分に捉えきれていないことも、また確かであろう。それらがくつきりとした像を結ばず、細部は漠としている。そして、この問題が姑息な手立てで乗り越えられる性質のものではないことは、くり返えし述べたつもりである。共同合宿への呼びかけは、

個別状況という前提のもとに於ける無政府主義の有様を見る

ならば、運動の多極化、分解の過程を旧来の不毛なる慣れ合いでしか解決せず、各個・各集団の関係を明らかにせずして過して来たと言えるのではないだろうか。現在、我々はこのような慢性化を根底的に断ち切り、自己の依拠すべきイデオロギー的立場を明確にし、公然としたイデオロギー論争を展開しなければならぬところに到達していると考えます。

と述べている。前半の部分、とくに「運動の多極化、分解の過程」は理解し難いが、論争の展開には全く同感である。全国連合の試みが今後どのように展開していくかは解らない。個別の目的があり、異った方法が可能なのかもしれない。ただ、個別が個別に終らず、運動として共有し得る質を意識的に追求することは、他の何ものにも代替のできない地平であることは確認したい。

最後に、現状に対するぼくの視点なり立場を述べる予定であったが、力が尽きてしまったので断片的に記することにする。

しばらく前に、問われてわれわれの運動の現状を解説したことがある。各地のグループの活動、規模や性格を概観した後で、まとめの意味で四つのことを述べた。それは、

1. 現在の運動は、世代的にみると三〇歳以下の世代が担っており、旧アナ連の人は含まない。(付記・もちろん例外はある)
2. 現在のところ、われわれは社会的影響力をもっていない。
3. われわれの課題の第一は、運動を構築するための方法、理論を得ることにある。

4. 現在、全国連合結成の取り組みがなされているが、結成に対しての賛否は半々であり難しい。しかし、われわれは今後五年

のうちに明確な展望をもつだろう。そして十年の後には十分に社会的な存在となるだろう。

というもので、日本の実情に不案内な人への説明ということもあって、細かい点は省いた表現をとっているが、われわれ自身を語るに適切でなくはない。それはまた、偽わらざるべく自身の確認なのである。

現状への視点については、非常に大まかにいうと次の点にある。六〇年代とくに六八―七〇年を頂点としたこれまでの思想潮流を概観しながら、政治セクトの後退と地域個別闘争の抬頭のなかに連合の、自由の、生活の要請を見い出すこと、そしてその分野においてこそわれわれの抱く思想が過不足なく展開されること、である。

それは政治がやはりものごとを根本的には変え得ないことの再確認である。短い一〇年余の日本をみても、世界的にこの半世紀の流れをみても、それらは政治革命のもつ人間解放の可能性と、それが何をもたらすかについての否定的な反証でしかない。日本の運動をみれば、六〇年安保はそうした運動への懷疑を、七〇年を頂点とした運動は反既成左翼を旗印とした新左翼の思想的解体を徴象する。他方では個別闘争の深まりと拡がり、個別諸闘争の連合という局面がすでに作られたつがあるのではないか。もちろん政治は死滅しない。しかし、かつてのように政治がその権力を振るう時代は過去に押しやられねばならない。個的自由と連合とを必要とする現実が存在すること、そうした状況に対するわれわれの課題についてである。これらの問題については、機会をみて論じたいと思う。

巻末資料について

編集部

全国組織の問題が提起されてすでに一年以上の月日が経た。その間に、この問題をめぐっていろいろな活動なり呼応した動きがあつたようであるし、それは今日進行中でもあるだろう。ここで触れられた京都と富士での会合（後者は全国連合の問題を目的としてはいないが）の後に、東京でもまた合宿（十月）がもたれている。現在提出されている全国連合の問題とその取り組みに対する賛意、批判はさまざまであろうが、ただ論点を曖昧にしたままこの問題を見過ごしたくはないと編集部では考えている。おそらく多くの人がそのように考えているだろうし、そのひとつの素材となることを期して、巻末に二つの論文を収録した。いずれもあまり人の目に触れる形で公けにされていないものであり、参考になればと考えている。ただ、この二つの論文が代表的ということでは決していない。「日本におけるアナキズム運動の可能性と我々の基本的方針」は、全国連合を主張する立場であり、『黒光』六号（一九七三年十月）より再録した。また、「アナキスト陣営内の共闘と連帯について」は、今年九月の富士における交流会の席上で、出席者に配布されたものである。本誌の掲載論文ともども、意見・批判を寄せられるよう期待しています。

× ×

×

×